

## P-033

知的・発達障害のある人に対する  
現代の大学生の意識と態度田中 里実<sup>1</sup>、森鼻 千穂<sup>2</sup>、橋本 創一<sup>2</sup>、小柳 菜穂<sup>3</sup>、  
三浦 巧也<sup>4</sup>、岡本 茉桜<sup>5</sup>、佐藤 翔子<sup>5</sup><sup>1</sup>東京都立大学<sup>2</sup>東京学芸大学<sup>3</sup>東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科<sup>4</sup>東京農工大学<sup>5</sup>東京学芸大学大学院 教育学研究科

## 【目的】

現代の大学生の知的・発達障害のある人に対する意識と態度について明らかにする。

## 【方法】

大学生1200人を対象にWebアンケートシステムを用いて、意識（顕在的ステレオタイプ、印象とその表出、知識の有無等）、態度（18項目5件法）、接触経験等を尋ねた。894件の回答のうち（回収率74.5%）欠損のない681件を分析対象とした。平均年齢は19.67歳（ $<I>SD</I> = 1.13$ ）であった。東京学芸大学倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

## 【結果】

意識について、顕在的ステレオタイプあり群が499人（73.3%）、なし群が182人（26.7%）であった。さらに知的・発達障害のある人への印象等によりあり群を4群（ポジティブ群・カモフラージュ群・ネガティブ表出群・知識なし群）、なし群を5群（ポジティブ群・カモフラージュ群・ネガティブ表出群・知識なし群・当たり前群）に分類した結果、ステレオタイプあり／なし群ともにカモフラージュ群が最も多かった。

態度について、個人的関与3.63点（ $<I>SD</I> = 0.06$ ）、肯定評価3.35点（ $<I>SD</I> = 0.08$ ）、社会的関与3.39点（ $<I>SD</I> = 0.08$ ）、否定評価2.20点（ $<I>SD</I> = 0.08$ ）であった。群ごとにみた結果、個人的関与は顕在的なステレオタイプを保持している場合に低くなる傾向がうかがえた。さらに知的・発達障害のある人との接触経験を調べた結果、家族やクラスメイト、ボランティア等の直接接触経験者が566人であった（83.1%）。群ごとに調べたところ、ステレオタイプあり／なし群ともにネガティブ表出群において最も直接接触経験者の割合が高かった。また接触経験が全くない人の多くがステレオタイプなし群に分類された。

## 【考察】

現代の大学生の多くが知的・発達障害のある人に対し顕在的なステレオタイプを保持していること、ネガティブな印象をカモフラージュしていることが明らかとなった。また顕在的なステレオタイプは、援助やコミュニケーション等の個人的な関与に負の影響を与えうること、接触経験はネガティブな印象につながりうることも示唆された。知的・障害のある人への差別解消や共生においては、接触経験の中で生じた感情を取り上げて整理していく機会も重要であると考えられた。

## P-034

保育施設における新型コロナウイルス  
感染症流行時の各保育施設の感染管理  
状況について中島そのみ<sup>1</sup>、池田 美穂<sup>2</sup>、山下きぬ子<sup>2</sup>、松浦秩保子<sup>3</sup>、  
鵜野安希子<sup>4</sup><sup>1</sup>札幌医科大学保健医療学部 作業療法学科<sup>2</sup>常葉大学附属 とこは幼稚園<sup>3</sup>常葉大学附属 たちばな幼稚園<sup>4</sup>常葉大学健康科学部 看護学科

(旧 中京学院大学 看護学部)

## 【目的】

乳幼児の集団保育の場である保育施設は感染症にかかりやすい環境であり、感染予防が重要となる。新型コロナウイルス感染に関しても第6波以降、子どもの感染が増加し集団感染の傾向をみせている。しかし、感染症管理に焦点をあてた研究は少なく、その実態については明らかになっていない。そこで、新型コロナ感染症流行時における過去1年間の保育施設での感染管理状況を明らかにした。

## 【方法】

2022年12月、無作為に全国の5,000保育施設（幼稚園、認定こども園、保育所）の責任者にアンケートを送付し2023年4月までに776施設から回答が得られた。アンケートは「保育所における感染症対策ガイドライン」の項目を参考にした。本報告では、施設独自の消毒等による感染対策マニュアルの作成、保育施設で使用している手洗いの洗浄液または消毒薬、手洗い後の手拭き、こどもへのマスクの励行状況、職員への感染予防講習会の有無、保育者の健康管理の有無、保健室（医務室）の有無、看護師数について分析した。本研究は中京学院大学研究倫理審査会の承認を得て実施した。

## 【結果】

施設独自の消毒等による感染対策マニュアルの作成については63.5%の施設で行われていた。手洗いの洗浄液または消毒薬について（複数回答）は、液体せっけん（泡石鹸も含む）の使用が97.4%と多かった。手洗い後の手拭き（複数回答）はペーパータオルが88.7%、個別タオルなどが57.5%であった。こどもへのマスクの励行は65.2%、職員への感染予防講習会は66.9%、保育者の健康管理は91.6%で実施されていた。保健室（医務室）は68.2%で設置され、看護師の数は2人以上が7.0%、1人が28.1%、0人もしくは無回答が64.9%であった。施設種類別で違いがみられた項目は、施設独自の消毒等による感染対策マニュアルの作成、職員への感染予防講習会の実施、保健室（医務室）の設置、看護師数が1人以上配置されている割合で、幼稚園が他の施設に比べて少ない傾向にあった。一方、こどものマスクの励行は幼稚園が他の施設に比べて多い傾向にあった。

## 【考察】

本調査より保育施設における感染症管理の現状が明らかとなり、施設種類別によってその状況に違いがあることが示された。今後は、園児数や保育士数の違いによる影響も含め分析を進めていく。